

宗教の社会的救済と民衆宗教論に現れた社会参与の意味 —円仏教の THAAD 撤廃運動を中心に—¹

元永常（円光大学校）

【要旨】

本論文は、韓国宗教の一つである円仏教の公共性を、THAAD 撤廃運動を通じて確認したものである。円仏教は、1916年パク・ジュンビン（朴重彬、1891-1943）の大覚によって開教された宗教である。改革仏教でありながら、現代仏教である。その教義は、社会参与的な性格が強い。その属性は、仏・法・僧の三宝を現代的に解釈した教団である。最近の円仏教は、社会教化の一環として韓国の平和運動の音頭を取っている。昨年の2017年には、二度に渡って円仏教の重要聖地である慶尚北道星州郡韶成里（경상북도 성주군 소성리）に米国の戦略資産である THAAD（=Terminal High Altitude Area Defense、終末段階高高度防衛体系）が配置された。朝鮮半島には無用な戦争武器でもあるが、何の法的手続きも、例えば環境影響評価や住民との対話も、一切行われなかった。さらに米国政府もためらう宗教聖地への軍事武器配置をすることによって、韓国憲法第20条の宗教の自由条項を無力化させた。数多くの平和運動家がこの違法を訴えるために集い、円仏教もまた星州聖地守護非常対策委員会を発足し、この THAAD 撤廃運動に積極的に参与している。筆者もまたこの運動に自発的に参与し、様々な活動を行っている。

この問題の源は、朝鮮半島の分断と関わりがある。したがって、この THAAD 撤廃運動は、朝鮮半島の平和運動へと拡散されている。その運動の中心に宗教界がある。円仏教もまたその一部を担っている。本論文はこの THAAD 撤廃運動の過程を通じ、円仏教が掲げる平和観とは何か、この運動に参与する円仏教の平和運動の意味について確認するつもりである。韓国の民衆宗教である円仏教は、開教からまだ100年しか経っていない。しかし、宗教の誕生もそうであるが、当時の民衆と一緒にこそ、その存在の意味があるだろう。現代宗教として、このようなダイナミックな姿をどう現しているか、確認するものである。

【目次】

I. はじめに

II. 円仏教 THAAD 撤廃運動の過程

III. 円仏教の平和観

IV. 円仏教 THAAD 撤廃運動の意味

1. 社会参与と平和運動の当為性

2. 正義 教義の社会化

V. 結び

I. はじめに

2016 年から 2017 年、そして現在に至るまで、韓国は政権の変化のみならず諸側面において激動の時期を経ている。その間、国内外的に重要な事件の一つが朝鮮半島の THAAD（高高度ミサイル防衛体系）配置問題である。現在もその過程に置かれているのであるが、朴槿恵（パク・クネ）と文在寅（ムン・ジェイン）の両政権を貫通し、東アジアの安保問題に深刻な状況を招いている。ここには米国と中国、韓国と北朝鮮、ロシア、日本など朝鮮半島をめぐる様々な国家の利害関係が反映されている。このようなマクロな観点のみならず、THAAD 配置が進行中の朝鮮半島と直接的に関連のある地域の立場からも多くの問題が提起されている。特に、星州と金泉地域はこの THAAD 配置問題に対する様々な反対意見と運動が繰り広げられている。また、THAAD 配置地域と直接関連のある円仏教もまた、この問題に積極的な反対運動を行っている。

この THAAD 問題は、既に多くのメディアでも扱われて来たが、いくつかの点において深刻な問題点を抱えている。第一に、憲法第 10 条「全ての国民は人間としての尊厳と価値を有し、幸福を追求する権利を有する。国家は個人が有する不可侵の基本的人権を確認し、これを保障する義務を負う」と言う条項から鑑みるに、基本権として国民の幸福権、平和的生存権、財産権、健康権、環境権の問題が提起されている。第二に、憲法 60 条「国会は、(中略)安全保障に関する条約、(中略)主権の制約に関する条約、(中略)国家若しくは国民に重大な財政的負担を負わせる条約(中略)の締結及び批准に対する同意権を有する」と言う条項と THAAD 配置の問題である。米韓相互防衛条約第 4 条では、米国が韓国に敷地を要求した場合、これを提供することになっているが、この法律効力の側面において、上位にある憲法に準ずるべき場合、現在 THAAD 配置過程において発生する国会の同意が必要となるはずであるが、このケースをどう判断すべきかが必要である。

また、国防・軍事施設事業に関する法律（国防施設事業法）では、「(前略) 事業計画を公告し、(中略) 利害関係者の意見を聞き、(中略) 地方自治団体の長と協議 (後略)」 するようになっているが、現在までこの協議は為されていない。これに関連し、環境影響評価に関する事項が争点である。環境影響評価法第 23 条には「国防部長官が軍事上高度の機密保護が必要であるか、軍事作戦の緊急な遂行のため必要であると認め、環境部長官と協議した事業」に関しては「環境影響評価の対象から除外する」とされているが、既に広く公開されている現実をふまえると、戦略環境影響評価を行って然るべきである。しかし、小規模な環境影響評価を既に施行し、環境部からこれに対する条件付きの承認を得て、THAAD 配置は進められている²。これ以外にも軍事施設保護法、住民意見の収斂過程、2017 年 4 月 26 日と 9 月 7 日の両日における奇襲的な配置過程に発生した警察公権力の行事問題など、様々な問題が複合的に絡み合っている³。

ところで、これ以外にも憲法 20 条に「① すべての国民は、宗教の自由を有する。② 国教は認められず、宗教及び政治は、分離される」という内容をふまえると、円仏教の聖地である星州韶成里に宗教の自由が制限されることに対する問題がある。現在 THAAD 部隊が駐屯している韶成里とその一部である旧ロッテゴルフ場の場所は円仏教の第 2 代宗法師を歴任した鼎山・宋奎（ジョンサン・ソンギョ、1900 - 1962）の故郷であると同時に求道地であり、巡礼路がある場所である。このような場所に一切の相談無しに軍事施設、しかも外国の軍隊が駐屯するということは、宗教の自由と政教分離の原則にふれるのではないかと争う余地がある。円仏教の立場からは、以前に軍事施設物設置に対する国家政策に同調したことがある⁴。しかし、韶成里一帯は円仏教人達の聖地であるという認識が支配的であるにもかかわらず、国家はこれに対する対話や協議を一切しなかった。

このような問題は、現在金泉と星州そして円仏教が共助し、民主弁護社会のような様々な法律的チャンネルを通じて訴訟中にある。このあらゆる問題が法律的に判明されるには長い時間を要すると見込んでいる。そのように慌ただしい中、THAAD 部隊は反対する数多くの市民の座込みを瓦解させ、2017 年に韶成里の村の前を通過し配置された。政府は今後一般環境影響評価を経てこの問題を THAAD 配置する方向へ完結させる方針である。これもまた矛盾している。大多数の住民が反対する一般環境影響評価でさえも実施されていないのに、既に配置を既成事実化している点は法律に反するのである。このように政府は一方的にこの問題を住民の意思とは関係なく進めている。すべてが不透明なまま、THAAD 部隊配置だけは一瀉千里に進行している。部隊配置もまたその所有主である米国の配置教

範に反している⁵。韓国は北朝鮮との対峙状況にかこつけて多くの側面において国民の少数の意思が排除されてきており、国家の法律もまたこのような特殊な状況によって過程の矛盾を犯している実情にある⁶。

この問題は円仏教においては国家との関係を新しく定立しなおすべき緊急の課題となった。単に政教同心と言う次元の問題はなく、より深層的な関係設定が求められている。さらに円仏教の社会教化と言う次元からこの問題をどう解いていくべきかと言う話頭も生じた。現在この韶成里には星州聖地守護円仏教非常対策委員会（以下、非対委）が活動を行っている。この非対委は円仏教教団の全面的支持を受け、公式的に形成された組織である。この組織を基盤に出家・在家の構成員たちが物的、精神的、肉体的支援と活動をしている。THAAD 配置問題は、円仏教が必ず取り組んでおくべき重要な事案になったのである。本論文は、この問題をどう見るかに対する試論的な研究である。検討すべき点は多々あるが、今後補完しながら完結した論文へと仕上げていくつもりである。

II. 円仏教 THAAD 撤廃運動の過程

円仏教の THAAD 撤廃運動は、2016 年 9 月 6 日第 4 回角団会（最上位出家教化団）において満場一致で星州聖地守護非常対策委員会の構成を決議したことから公式的に始まる。もちろん 8 月 23 日に THAAD 撤回「円仏教星州対策委員会」が結成されたが、8 月 30 日に敷地決定が公式化され、第 3 敷地である星州韶成里「ロッテゴルフ場」に THAAD 配置が発表された後である次の日、円仏教星州対策委員会は教団規模での対策委員会へと拡大改編し、公式名称を「THAAD 撤回及び星州守護円仏教対策委員会」と定めた。

この非対委は、円仏教の出家者と在家信徒で構成されている。したがって、金泉で活動している平和天幕教堂の担当教務であり、THAAD 配置反対金泉対策委の共同委員長（チェ・ヨンジョン教務）と星州 THAAD 反対対策委前共同委員長（キム・ソンヒェ教務）もまたこの対策委員会に属しており、この非対委は金泉と星州両方に参与する形になった。THAAD が配置された韶成里は現在円仏教星州聖地事務所となっており、韶成里教化とここを訪れる巡礼客の案内を請け負っている。非対委は結局 THAAD と直接的にかかわる地域全体で全方位的に活動している。

彼らの主な活動こそ、円仏教 THAAD 反対運動の全体であると言える。組織を通じても分かるように、金泉、星州、韶成里地域の活動が中心になっている。この非対委は、円仏

教環境連帯など円仏教社会団体が主軸になっており、全国的なネットワークを有している。したがって、ソウルのように地域的に重要な位相の場での活動もまたこの地域ネットワークを活用している。このような活動は現在まで THAAD 反対決死運動、韶成里 THAAD 配置反対運動、THAAD 反対広報、金泉、星州、韶成里、そして日本と米国の THAAD 反対団体との連帯、組織活性化、基金の拡充など、多様な側面から活動している。

後述の簡略な活動日誌⁷からもわかるように、円仏教 THAAD 反対活動は多様な領域で行われている。まず第一に、祈祷会及び集会である。韶成里に平和教堂を設置し、時期によって毎日または毎週決まった時間に THAAD 反対のための祈祷会を開催しており、韶成里、ソウル光化門広場などを中心に THAAD 反対及び糾弾大会を開いた。

▷2016 年 9 月 7 日：THAAD 撤回と聖地守護のための円仏教祈祷会/ソウル国防部前 3000 余名参加

▷9 月 12 日：円仏教平和瞑想祈祷会/午後 2 時ソウル光化門広場、参加 800 余名

▷2017 年 2 月 28 日：韶成里平和教堂設置、祈祷開始

▷4 月 20 日（木）：戦争反対、THAAD 反対、専ら平和「千万回の空、千万個の平和」平和 100 拝 ジンバツ（진밭、湿った畑、地名）平和教堂で午後 4 時開始

▷4 月 27 日：光化門広場 1 千万拝平和祈祷開始

▷11 月 23 日（木）：午前 11 時 THAAD 撤回のための平和 100 拝開始/主幹円仏教非対委/韶成里村会館前

続いて第二に、法律対応である。初頭で言及したように、THAAD 配置は様々な法律的問題を抱えている。THAAD 配置それ自体もそうであるが、配置過程において生じた様々な問題も法的に是非が問われるべきものである。この点を法律諮問を通じて多様な方法で判断を求めている。

▷2017 年 3 月 25 日：国会権限争議審判請求と韓民求（ハン・ミング、前国防部長官）弾劾促求署名と憲法訴願請求人募集

▷4 月 18 日（火）：THAAD 敷地米軍供与手続きの即刻中断促求記者会見 13:30 外交部前、星州、金泉、円仏教参与一国有財産特例制限法改正なき THAAD 敷地供与は違法記者会見

▷5 月 8 日：敷地供与執行停止可処分訴訟審議 ソウル行政法院（行政裁判所）進行

▷7 月 11 日（火）：星州・金泉住民、国防部の戦略環境影響評価未実施など不作為違法確認訴訟 弁論期日進行と記者会見

▷7月12日(水):国民監査請求記者会見 13時監査院前・星州、金泉、円仏教 450 余名
国民監査請求進行、金善明(キム・ソンミョン)執行委員長発言と接受

第三に、THAAD 配置に対する直接的な反対行動である。特に 2017 年 4 月 26 日と 9 月 7 日は THAAD が敷地に送り込まれた日である。4 月 26 日にはレーダーと THAAD 発射台 2 台が送り込まれ、9 月 7 日には残りの発射台 4 台といくつかの関連装備が送り込まれた。この時、円仏教は金泉と星州市民達、数々の平和運動家達と共に韶成里を中心に連帯しこれを積極的に防御した。しかし 2 度にわたる THAAD 搬入のため政府は各々 8,000 人の警察を韶成里一帯に配置させ、この反対運動を弾圧した。この過程で多くの人が怪我をし、公務執行妨害罪で逮捕された。

▷4月20日(木):THAAD 敷地工事車両ロッテ CC 奇襲搬入、阻止過程で円仏教非対委シチュエーションルーム長のユン・ミョンウンと住民らが負傷、ガン・ヒョンウク教務と星州住民など 2 名が警察に強制連行後、午後 8 時頃釈放

▷4月26日:THAAD 発射台 2 機臨時配置

▷5月4日(木):軍部隊副食車(食料搬送用車)に偽装した油類搬入試行を平和守り隊が阻止一午後 8 時違法小細工油類搬入糾弾韶成里緊急集会

▷9月7日:THAAD 発射台追加 4 機臨時配置/韶成里平和守り隊 THAAD 追加配置聖地守護抵抗活動

▷11月21日(火) 5:30~14:30 THAAD 敷地違法工事車両と資材搬入阻止闘争進行/違法工事装備と車両進入暴力強行糾弾大会/韶成里村会館前/THAAD 阻止平和会議 120 余名参加

第四に、平和広報及び連帯活動である。声明発表、平和パフォーマンス、言論活動、平和会議など、円仏教の平和精神を広める一方、金泉、星州などを含む所謂 6 主体の THAAD 反対闘争委との連帯活動である。韓国をはじめ米国、日本の諸平和団体とも連帯を通じ THAAD 反対運動を行っている。韓国の場合、密陽(ミリャン、地名)送電塔反対運動団体、済州江汀(チェジュ ガンジョン、地名)海軍基地反対運動団体、平澤大秋里(ピョングク デチュ里、地名)米軍基地反対運動団体などが代表的である。日米とは米軍部隊の世界拡張に反対する団体、沖縄・京都など沖縄米軍基地反対運動団体との連帯である。

▷2016 年 10 月 11 日:One-Peace 宗教・市民平和結社(平和祈祷会・平和結社・平和行進) /午後 2 時~5 時ソウル普信閣、清溪広場/円仏教出在家、金泉・星州住民、5 大宗団宗教人、市民社会団体など 4,000 余名参加

- ▷11月12日:国政壟断、THAAD 壟断、THAAD 配置無効平和行動／国防部前で光化門
- ▷2017年3月18日(土):第1次 THAAD 阻止韶成里平和行動／円仏教出在家教徒300余名を含む約5,000余名参加／ジンバツ(진밭)橋前24時間徹夜平和祈禱テント設置とジンバツ平和教堂開始
- ▷4月2日～17日:キム・ソンヒェ教務星州闘争委共同委員長資格で米国平和団体招請で米国東西部7都市で平和講演
- ▷5月21日(月):光化門米大使館前平和行動と青瓦台前リレー式一人デモ開始
- ▷6月3日(土)～5日:日本京都経ヶ岬 THAAD レーダー基地訪問／執行委員長 金善明教務、シチュエーションルーム長のユン・ミョンウン
- ▷6月14日(水):円仏教非対委主幹韶成里定期水曜集会主幹－日本 THAAD レーダー基地反対京都連絡会運営委員招請講演会
- ▷10月28日(土):14:00 ろうそく集会1周年とトランプ米大統領訪韓に際した THAAD 撤回促求平和行動／青瓦台噴水台広間前歩道／円仏教非対委、星州住民対策委、金泉市民対策委、平統人(平和と統一を開く人々)など主幹、150余名参加

その他にも THAAD 反対運動のための核心的構成員である死無余恨団の募集と活動、光化門での断食活動、平和マラソン、生命平和巡礼、THAAD 反対と朝鮮半島平和のために焚身した故チョ・ヨンサム霊駕49日追悼祈禱、平和紀行、医療奉仕活動、映画祭活動、基金募金活動への参与など様々な方面で行われている。

Ⅲ. 円仏教の平和観

THAAD 配置反対の立場から、円仏教は平和と言うスローガンを掲げている。平和と言う語は多様な意味を内包している。ひとまず平和に対する論議は置き、ここでは、円仏教が主張する平和論または平和思想とは何かについて円仏教の教えから見てみよう。

それは何より、少太山大宗師が悟った一円相の真理に基づいている。その構造の第一は根源性で、この真理は宇宙万有の本源であり、諸仏諸聖の心印であり、我々衆生の本性を意味する。第一の原因としての根源は、宗教的世界の本質を形成する。人間と万物の本質の根源を文化的伝統のなかから見つけ解釈するのが宗教の役割とするなら、あらゆる宗教の究極的至点はすなわち一円世界で落ち合うと言える。

第二に、円融会通性で有無、主客、陰陽、聖俗、生死など相対的な万事万物を超え、不

二の世界へ入る門を意味する。現実では霊と肉、理と事、物質と精神、科学と道学など、会通の観点として現れる。第三に、円満性として一円相の真理が人間に具体的に現れる円満具足で至公無私な状態を意味する。円満性を回復した社会は、真理的な生（畚）が具現された楽園世界と言える。『正典』「展望品」でも明らかにされているように、あらゆる存在が完全な主体者である仏としてそびえたつと同時に、相互尊重する竜華会上のような平和世界なのである。

西勢東漸の近代、少太山は植民地と戦争の苦痛を通じてその原因である帝国主義と、それを孕む近代文明の限界を認識した。その危機的状況で円仏教は「物質が開闢されたので、精神を開闢しよう」といった開教標語を掲げ出発する。近代文明の寵児は科学である。この科学のバランスを取る世界が精神、すなわち道学である。そのバランスが崩れることで伝統の価値が解体され、人類は自己分裂的の症状を見せているのである。

ジョージ・リッツァ (G. Ritzer) は『マクドナルド化する社会』において現代文明の代表的現象であるファーストフードを通じて、規格化・便利性・効率性など近代性の不合理と非人間化を鋭く批判している。世界のマクドナルド化は伝統の解体及び価値の消滅の上で行われている。少太山が仏教は修行観、倫理観、宗教性、人格性において世界的な宗教として高く評価したのも、このような伝統の現代的復元を念頭に置いての事である。

ウルリッヒ・ベック (U. Beck) もまた、現代文明の危険要因である合理性に対しての科学の独占を批判し、科学の合理性に対して道徳的観点が前提とならなければならないと主張する。道徳はすなわち社会、政治、経済の前提条件なのである。アダム・スミスが『国富論』に先立って『道徳感情論』を主張したのはこれをよく表している。少太山は「教義品」において「現代のように物質文明にのみ偏り、精神文明をないがしろにしてしまっは、まるで頑是無い子供に刃物を持たせた如くであり、いつかどんな禍を被るかわかったものではないので、これは肉身は備わっているが精神が病んでいると言う障害を持つのと同然であり、精神文明のみで物質文明のない世界は、精神は備わっているが、肉身が病んでいると言う障害を持つのと同然である」と見做し、この両者が充実する内外文明に併進された時代こそ「欠陥なき平和と安楽の世界⁸⁾」と主張したのと通じている。

この克服のために「分別性と住着心をなくし、外に散乱を招く境界に絆されず、明確で静寂な精神を養う」ことを三学の精神修養の綱領としている。しかし、外部世界に対する不確実性から触発されたデカルトの二元論的存在論は現代社会においても継続的な影響を及ぼしている。スピノザ、ヒューム、フッサールを含め多くの人々が批判を加えたが、科

学発展の影から未だに脱し得ていない。少太山は自我分裂の起点である個体の欲望が宇宙自然との分裂を生み、この分裂が差別を生み、あげくの果て世界に葛藤と対立で満ちていると見ている。平和の根本は、このような自我及び世界の分裂をどう統合し治癒するかにかかっていると云える。

ならば少太山の平和思想の要素は何か⁹。第一に、中道と中庸である。一円相の真理に対する見性と養性の過程を経て、率性において生じる行動を無念行・無着行・中道行と言う。正覚正行、つまり悟りのもとで行う六根の不偏不倚で過不及のない円満行こそが中道の行為なのである。例えば、殺生は因果の連鎖のみならず、中道的な生（畚）の平静を壊す。円仏教において、貪・瞋・痴の三毒心が消滅してこそ、聖者の域と見做すのは内的平和が外的平和の中心になるからである。これを平和の現実的条件に還元するならば、民主性と公共性を意味する。民主性は市民社会の中庸的徳性であるとすれば、公共性は平和のための一つの中庸的徳目なのである。

第二に、相生と調和に「無くては生きていけない関係」である恩恵に根源している。これは仏陀の縁起論による。仏陀は、この縁起を理解する者は自身と真理世界を理解する者と等しいと見た。縁起思想は大乗仏教の過程で社会的縁起論へと拡散する。実相論的な縁起論が、人間の目通りに合わせた社会関係論に調整されたのである。円仏教ではこれを継承し、絶対恩の教義として体系化したのである。

社会内においては、全員が共存する同胞恩の内的原理である自利利他になる。ここには『大学』に書かれている宗教的黄金律として他者を慮る絜矩之道の実践的倫理までもが含まれる。これが相生である。調和は多様性が存在する形態でもある。それがよく表れているのは「強者・弱者、進化上の道¹⁰」である。この道は平和学者ヨハン・ガルトゥング (J. Galtung) が言及した文化的暴力、または構造的暴力に対する対応を可能にする。進級と降格が循環する社会的縁起論に基づいた葛藤解消の平和的モデルといえよう。

第三に、寛容と摂取不捨である。寛容は、絶対的信仰の前で行われる宗教的行為である。ここには一つの存在も捨てないと言う摂取不捨が前提とされている。仏法研究会に娼婦達が出入りすることに対する弟子達の不満に、少太山は仏性の原理と仏法の大慈大悲心に基づき、彼らをより積極的に受け入れ済度しなければならないと表明する。このような寛容は、円融な法身仏の真理のもとでは善と悪からなる存在も拒まれてはならないことを意味する。ここから、カントの哲学を見出すことができる。彼は道徳的に正しいことがあれば、それは普遍的法則にならなければならないと、他人を手段としてはならず、常に目的それ自体

ならなければならないと言う。カントのこのような言葉は今日の平和学の基本命題となっている。

次に、このような平和思想がより拡張されたものとして、少太山の弟子であり第2代宗法師を歴任した鼎山（ジョンサン）・宋奎（ソンギョ）の三同倫理を提示する。同源道理・同気連契・同拓事業の三同倫理¹¹は世界普遍倫理の確立、中道調和の政治、大慈悲攝取不捨の精神として分類することができる。

まず、世界普遍倫理との関係である。世界宗教者平和会議（WCRP）は、1970年に共に生きる世界のために行うべき内容について、共同の人間性、共同の安全、相互依存性、共同の未来、共同の生（畚）、包括的な教育、希望と献身の7項目を掲げた。このような内容は、世界普遍倫理を確立させる礎であるといえよう¹²。

しかし、このような普遍倫理を構築するためには文化的多様性を認め、抱擁し、尊重するなかで、皆に通用され得る普遍性を掲げる必要がある。特に多様な文化、国家、民族、宗教の特殊な価値を超え、これらの価値が調和しつつ共存し得る法案を見出すことが重要である。そしてこのような普遍倫理は全体の共同善への目標、そしてこのような目標が個人善においても符合する場合にその当為性が成立する。つまり、自利利他の場合に世界普遍倫理が成立し得ると言える。このためには全人類に共通する価値規範である超越的な価値を確保する必要がある。

鼎山宗師は、『鼎山宗師法語』「道運編」22章において、世界平和の3大要素を「主義は一円主義、制度は共和制度、組織は十人一団の組織」としている。ここでの一円主義とは、周知のように「宇宙万有の本源であり、諸仏諸聖の心印であり、一切衆生の本性」といった一円相の真理を意味する。このような一円相の真理が普遍倫理として可能であることを示しているのが同源道理である。第一の原因としての宇宙の根源、あらゆる宗教的・文化的価値具現者の哲学、そして一般民衆の善たる本性を規定する一円相の真理は、世界普遍倫理の根拠と見ることができる。

誰もが共感する倫理、しかし、現実的には文化的水準のなかでも上層に属する各宗教の特殊性により合意が難しい。したがって、その前提となる方式が必要なのである。それが「あらゆる宗教と教会が、その根本は全て同じ一つの根源」という同源道理なのである。これを、宗教的世界観を通じて見る時、包括主義や多元主義と見做すこともあるだろう。しかし、同源道理が根拠としている一円相の真理には、既に般若空思想のような論理が前提となっている。真理それ自体は何とも言い得ないものであり、まして所有できる

ようなものでもなく、言葉を以てしても表現しきれないものである。そして、それさえも、言語を以て絶対化できないものであると言う点である。それが即ち一円相の真理なのである。我々は具体的に木や石を象徴と成し得るけれども、これは完全に悟りの象徴なのである。つまり象徴とは何かを指すことであり、何かを指して象徴化された真理が法身仏一円相だと言うことである。

さらに注目すべきは、同源道理は宗教の固有な思想や哲学を尊重し、その根源的な「何か」の一致を志向していると言う点である。超国家的、超文化的でありながら、全人類の理念を疎通可能にさせる世界主義なのである。

同気連契もまた、必要不可欠な恩的存在として縁由している。あらゆる存在は、互いに一つの気運で繋がった同胞として縁起の関係のなかにある。これは人間と人間、人間と自然、自然と自然が縁起的生命を通じて存在していることを意味している。世界倫理化の作業には1993年、シカゴ世界宗教会議の100周年記念会議の地球倫理宣言(A Global Ethic)にて「我々は皆互いに依存している」「我々は人類を一つの家族だと考えている」と言っていることから見られるように、このような相互依存の思想が同じように表れている。

同拓事業も、全体を一家族として見做す一円主義に基づいたものである。同拓事業と共に、強者弱者進化上の要法は世界平和のための仏法民主主義を構築する重要な倫理に成り得る。平和、共存、正義を旗印に、新しい世界倫理の基盤を構築できるだろう。

このように三同倫理は相互主義共同体を目指した平和構築のための世界市民性の徳目に成り得ることをよく表している。

第二に、中道調和の政治である。鼎山宗師が何よりも強調したのは中道思想である。前述した世界平和の3大要素のうちでも、共和制度を言及している。この共和制度体制は一円主義を具現するための具体的な制度である。鼎山宗師は『鼎山宗師法語』「道運編」25章にて「この世のあらゆる名と実が共に共和の精神を持つことができれば、天下に何の難事がありえようか。ゆえに我々は世界に対する時に権利を独占しようとしてはならず、利益を独占しようとしてはならず、名誉を独占しようとしてはならず、待遇を独占しようとしてはならない。そうすれば、自ずから共和となり平和は自然に成立されるだろう」と言う。鼎山宗師はこの共和の精神を「独占しない精神」と見なしている。厳密な意味で社会が構成員全体に属すると言う古代ローマ政治の根本とも符合する言葉である。共和の語源であるラテン語の *respublica* が共同のものと言うことからそう見ることができる。

最近の政治学界や哲学界で唱えられるように、世界の歴史は王を中心とする王権政治か

ら市民が各々権利を行使する民主政治の歴史へと移り変わって来たと思われている。このような過程で権力は分化され、代議または直接民主制が、確立されたのである。すべては法によって規定され、主権は国民が有する。その核心原理は国民の間においてあらゆる差別が否定され、自由と平等が謳歌される。こうなるまでは絶対王政を取り壊した 17 世紀イギリスの清教徒革命、18 世紀アンシャン・レジーム（古い体制）を取り壊したフランス革命、19 世紀ツァーリの統治を取り壊したロシア革命など、様々な市民革命があった。

ところで、このような民主政治の歴史は、韓国の現実においても見られるように、均斉と均衡が求められる。数多くの大衆の要求を受け入れ、それを実現させるためには節制と妥協が求められるのである。そのようなことを仲裁する理想的な方法が中道なのである。中道は辞書的な意味から見ても分かるように、どちらか一方に偏らないことを意味する。広い意味ですべてを抱擁するということである。東西と南北の境界を包括し併せると言うことである。

鼎山宗師は『建国論』において、心の団結と自力確立を主張し、これを具現することにおいて中道を参考にしている。中道取捨、気遣い（配慮、マウム スム）の中道、そして政治の標準を中道に置いている。「不偏不倚 無過不及の中道」は鼎山宗師の一生の生の標準であったと言える。この中道は東西古今の聖賢が強調する徳目である¹³。何よりも、円仏教の霊肉双全、理事並行、処処仏像、事事仏供、無時禪無処禪、出家在家無差別、男女権利平等、聖俗一致など、教義体系と教団の運営はこの中道に基づいたものなのである。

特に、『建国論』は国家を建立させるにおいて鼎山宗師の中道政治哲学を垣間見ることができる。精神、政治、教育、国防、建設・経済、進化の道を通じて国家の繁栄を唱えている。その目標は人本と平等に基づく共和杉を実現させることにある。このうち、政治に対しては民主国家を建設すると同時に中道主義を運用すべきとある。「相手側と互いに権利の偏重がないと同時に、また各々の権利を正當にうまく運用することであるため…(中略)微塵も強圧搾取と横暴を恣行する弊端が生じないようにする方法」を中道主義であると言う。このような主張は、無限絶対者としての法身仏を前提にした三同倫理の大同社会を建設しようと言う意思と一致する。

このような思想は直接的な暴力のない消極的な平和、葛藤を非暴力的な方法で解決しようとする積極的な平和を主張するヨハン・ガルトゥングの平和思想をどのようにして具現化するかといった点において、そのヒントとなる。特に、構造的な文化的暴力に対応する方式でも論議の必要がある。鼎山宗師のすべての中道の意味を総合すれば、修行体験を通

じて獲得した構造内に閉ざされた中道ではなく、開かれた中道を現代の政治哲学に投影させることで平和な世界を建設すると言うところに、その意味があると言える。

第三に、大慈悲の攝取不捨精神である。この点は少太山の思想と同じであるため、ここでは省略する。

IV. 円仏教の THAAD 撤廃運動の意味

1. 社会参加と平和運動の当為性

THAAD 反対運動に参加する円仏教の宗教的な性格は、市民宗教と公共宗教だと言える。逆にこのような性格に目を配ると、この円仏教の THAAD 反対運動に伴う平和運動の当為性を見つけることができる¹⁴。

まずは円仏教の市民宗教性について見てみよう。

円仏教は、市民宗教に関する議論が西洋でしばらく行われている最中に生まれた。この市民宗教に対する議論は、フランス第三共和政で 1905 年に政教分離法が制定され、近代国家としての宗教との分離を通じて宗教の新たな役割を模索するための努力とも重なる。近代社会は政治、社会、文化的な中世の宗教支配から脱して確立し始める。したがって国家の使命もまた空白になった宗教の役割をどのように満たしていくかと言う点が台頭されたのである。だからといって、宗教に対する大衆の熱望が国家によって完全に対峙されたり消えたわけではないのである。

市民宗教についてはルソー、カント、デュルケム、トルクビル、ベラなどの主導により議論されてきた。

これを総合すれば、市民宗教は自分の神聖な領域を社会に開放する宗教である。社会の統合と霊性の社会的共有、あらゆる社会活動の動機を付与するとともに、すべての存在の根拠を合理的に提示できる宗教である。結論から言えば、円仏教の立場では一円相の真理と「四恩四要」の教理が普遍化することであるだろう。宗教の教義が、普遍化されることである。

円仏教の宗教的性格について、筆者は既に参加仏教（Engaged Buddhism）と述べている。これは仏教の歴史において「時期相応」と表現されてきた。この両者は、本質的に同じ意味である。円仏教は仏法の時代化、生活化、大衆化のために生まれた教団である。参与仏教こそ市民宗教を意味する。そして、その市民宗教の円仏教的根拠は、厳密に言うと

「四恩四要」を意味する。円仏教の社会参加的な性格は、教育と福祉を教団方向の三つの要素に制定したもの、四恩は社会平和の原理と言う点、四要は世界の不平等要素を改善し、改革しようとする社会的教理と言う点で、もはや参加宗教としての教義は確保されていると言える。これについては、より具体的に議論をする必要があるが、紙面の都合で省略することにする。

ただし、ここで宗教の社会参加への正義を筆者なりに考えたい。第一に、個人的な信仰と修行の領域を超えて社会に積極的に宗教的教義を拡大し、参与することを言う。第二に、こうした参与において社会の葛藤と矛盾的な要素を把握し、除去するための教義的な努力を傾けることである。最後に、単純な福祉や教育も宗教の社会 参与であって、またこれを越えて社会的正義と平和、人権と生命のために積極的な宗教的活動をすることまでを言う。

ブルデューは、現代社会を動かす資本を経済資本、文化資本、社会資本、象徴資本に区分している¹⁵。このなかで、宗教はこれらすべての分野に所属している。宗教、経済、宗教文化は信者のネットワーク、象徴資本は信念と態度の正当化を言う¹⁶。このように、資本としての宗教までであってもそれ自体として社会的な産物である。社会を離れては存在することができない。自明の事実を円仏教は教義化したのである。「四恩」と「四要」は、宗教が全体の市民に葛藤よりは和解を、分裂よりは統合を、猜忌や嫉妬よりは理解と慈悲を与える教義である。この教義は、また市民が要求する合理的省察が可能である。これは一円相の真理がより衆生制度のために現実化されたことに由来するものである。

第二は、円仏教の公共宗教としての性格である。

公共宗教は最近、韓日の間に広がっている公共哲学に基づく議論である。公共哲学を一つの学問の場に導いたのは、金泰昌(김태창)である¹⁷。彼は公共哲学を三つの次元の相互運動と見て、次のように述べている。第一に、まず市民の立場で考え、判断し、行動して責任を負う哲学である。第二に、専門家の哲学として公共性の概念形成、歴史的発展及び現状を具体的に分析する。第三に、公共(する)哲学で公、私、公共の自己、他人、世界を相互運動する関係で把握する¹⁸と言う。そして、彼は公と私の間を「活私開公」と「公私共媒」と定義している¹⁹。

多少は社会哲学的な要素が介入されているが、歴史的現実を通じて照明してみると、この哲学が主張するのは自明である。一言で歴史の中で個別化・分離された公と私を調和を成して、それによって市民社会の発展を推進しようとするものである²⁰。

このような側面で趙晟桓（조성환）は、東洋的世界観の下で公共性の概念の起源を探している。彼は「公共性とは何か」と言う問いを理解するための一環として、まず「公共とは何か」と言う質問を投げかけている。

彼は 金泰昌（김태창）の研究に基づいて、漢字「公共」は、今から約 2 千年前に司馬遷が書いた『史記』に初めて登場すると見ている。具体的には、『史記』に収録された「張釋之伝」に初めに出ていると言う。ここで、「いくら天子であるといえども、法は普通の人たちと同じく公平に守らなければならない」と言う点に注目している。結局、「公共」は「みんなと一緒にする」、「公平と一緒にする」と言う意味になる。そして注目すべき点は、金泰昌（김태창）が前述したように、「公共」が名詞でなく動詞として使われている点であると言う²¹。公共が、観念的な哲学だけにとどまらないものと見ることができる。

特に、彼は『史記』「公共之理」²²を通じて、公共哲学は公理として、すべての社会的存在に適用される原理が、朱子が言う「宇宙が万物を生成する心」と言う宇宙論的な原理にまで拡張されたものであると言う。そして、これは近代になり滅私奉公の精神で国家に従属されることにより、世俗化されたと見做す²³。彼は、このように公共哲学を普遍性の原理から宇宙論の次元でまで昇華させようとしている。ここで初めて存在の本質と価値を重視する宗教も深い関連を持っていることがわかる²⁴。

そうであれば、円仏教は公共哲学とどのような関係を持っているか。これは一言で公共宗教としての哲学性を持っていると言うことができる。円仏教の教義は、開かれている。金泰昌（김태창）が前述したように、公共宗教は社会と民衆のなかで「活私開公」、すなわち個人の尊厳性を確保し、共に公共の価値の確保に参加する宗教を言う。従来のように、個人が公に支配されず、個人が仏としてむくむくと立って、すべての公共の価値を現すことを言う。また、不義と不条理を現実から打破する宗教を言う。円仏教の立場では、「一円相」の真理に基づいて、「三学八条」と「無時禪」の真理が遍満した世界である。また、不義と不条理を現実から打破する宗教を言う。

三学の精神修養で分別性を打破しようとすることは、自と他の境界、心と物の境界、主観と客観の境界、人種や民族の国と地域と世界が、既に一つとして展開されていることを認識論的に確認するものである。これより「活私開公」の世界がどこにあるのか。歴史的な誤謬である滅私奉公の用語は、国のために個人の私が犠牲になることによって、その言葉の本質は無視され、公共の哲学に反する歴史的用語となった。

円仏教の無我奉公は、小我ではなく、大我の概念である。これは数千年の間に宗教が持

ち続けた徳目を意味する。前述した「三学八条」と「無時禪」は、現実の生の中ではすべてが正義をこの社会で実践する教義である²⁵。私たちは、これまでこの教義を脱歴史的であって脱空間的な概念として理解した。しかし、宗教が歴史と民衆の現場にいるかのように、教義もまた歴史と民衆と共に現存し、存在の方向を主宰する。例えば、孟子の四端論が歴史性を帯びると、その価値を発することになる²⁶。

超歴史的な教義は、歴史と当代の民衆を基盤とする時、逆にその超越性を担保することになる。キリスト教の受肉と復活もまた、イエス・キリストの人間的の歴史を介して具現されたものである。その歴史の中で現場性が忘却された時、宗教は観念化される。少太山が歴史の桎梏から「一円相」の真理を現したのは、歴史上の教団と教義が存在することを、その真理を現さなければならなかったことを意味する。円仏教が公共宗教と言うのは、このように時間と空間の中で、個人の悟りと慈悲の精神が二つでないことを明確に示していることから明らかにしている。

これらの性格は、円仏教が対外的に宣明した宣言にもよく現れている。まず、1971年に円仏教開教半百年記念大会の大会宣言文の要旨である。①私たちは「三同倫理」として、世界の平和、人類の自由を達成することに先頭に立つ。②すべての人類は貧富の格差、種族の差別をなくし、大国間の軍備競争を終息させ、現代文明の公害を防止して、人類の平和を追求する。③国力の自主的培養を足場として善意の競争により祖国の統一を平和的に達成し、民族の英知と真実に基づいて、世界的の精神運動を私たちがこの地上で達成する。④宗教連合機構を通じて宗教的共同の課題を討議し、宗教を生活化することを決意する²⁷。これら四つの項目は、市民宗教と公共宗教として進むことを世界に約束をしたことではないか。「三同倫理」と世界の平和、平等の世界、精神運動、宗教的連合運動を通じた宗教の生活化は円仏教が普遍宗教として行く道を明示したものである。過去50年を振り返ると、円仏教はこの道をどれほど歩いてきたのか。私たちは、これまでこの教義を脱歴史的であって脱空間的な概念として理解した。しかし、宗教が歴史と民衆の現場にいるかのように、教義もまた歴史と民衆と共に現存し、存在の方向を主宰する。例えば、孟子の四端論が歴史性を帯びると、その価値を発することになる。

また、2000年の大宗師誕生百周年記念大会の宣言文である。①私たちは、人類の精神を開闢し、地面に広大無量な楽園の世界を構築する。②すべての宗教、思想、万の生霊を一つと見て一つの世界の建設の担い手となる。③「三学四恩」により活仏になり相克を相性に回し、世の中全体に自由の恵みを充満させる。④並進調和思想で「霊肉双全」、科学道学

で真の文明の世界を構築する。⑤「政教同心」と宗教連合運動により平和統一、世界平和に貢献する。楽園の世界、一円主義、「三学」と「四恩」、「霊肉双全」、「宗教同心」と宗教連合運動など教義の核心を網羅している。そうであるとすれば、これらの円仏教教法の社会化は、どれほど進捗したのだろうか。

最後に、2016年の円仏教百年記念大会の精神開闢ソウル宣言文である。「円仏教を創教した少太山大宗師は一円の真理を悟り、人類社会が「なくては生きていけない恵みの関係」であり、真理・世界・人類・職場が一つであることを明らかにし、「一つの世界」を開拓していくことを願った。

(中略)

- 一、私たちは物質を善用し、環境を尊重する相性の世界を作っていく。
- 一、私たちは心の勉強と積功で強弱が進化する平和の世界を作っていく。
- 一、私たちはお互いに感謝し、報恩する一つの世界を作っていく。

円仏教の創教の意味が、人類と共にしてきた百年の歴史をたどり、地球の問題に苦悩している。この解決を精神開闢に規定し、相性の世界、平和の世界、1つの世界を作るとを宣言している。このような宣言は、円仏教が市民宗教であり、公共の宗教であることを如実に示している。同時にTHAAD反対運動が、これらの宗教としての円仏教の当為的な活動であることを証明している。

2. 正義教義の社会化

円仏教思想の集大成である『円仏教大辞典』の正義の項目は、道理、規範、徳の中正、秩序、不義や権謀術数などの反対を述べている²⁸。直接的に教義に関連する事項は、言及されていない。正義に関する事項は、核心テキストである『円仏教正典』の教義編と修行編に記載されている。教義編では、「四恩」の法律は、「三学」の「作業取捨」、実行編では「無時禅法」、「率性要論」、「最初法語」に登場する²⁹。信仰の対象である「法律恩」の法則を人道正義の公正な法則としたのは正義が、教の構成の重要な要素であることを示している。「三学」の修行にも律行に対応する「作業取捨」の綱領が正義を取り、不義を捨てるという点は、実践教義としての意味を持つ。

「無時禅法」では「六根」が無事であれば、雑念を除去して一心を養成し、「六根」が有事すれば不義を除去して正義を養成せよと述べて、「率性要論」では「正しいことであれば、嫌でも死ぬ気でやるべきである」と言う。生を一つの修行で見る円仏教は正義の実践こそ

教義の具現に該当する。この点は、円仏教が仏教を改革した現代仏教の性格をよく現している。すなわち、参与仏教（Engaged Buddhism）³⁰として社会的役割を重視したと言える。THAAD 運動もこの点をよく示している。

正義は、少太山が述べたように「一円相」の真理に基づいている。

「一円相」の内容は、「四恩」であり、「四恩」の内容はすなわち宇宙万有である。天地万物・虚空法界の一つとして仏でないものはないことになるので、私たちは、いつ、どこでも、つねに畏敬の念を離さず、尊厳たる仏に対する清浄な心と敬虔な態度であらゆる物事に応じるものであり、あらゆる物事の各対象に、直接仏供を行うようにつとめ、現実的に福楽をもたらすようにする。これをまとめていえば、偏狭な信仰を円満な信仰にとりかえ、迷信的信仰を事実に基づく信仰にとりかえるようにするのである。³¹と述べている。「四恩」は遍満な「一円相」の真理が現実には形象化されたものを言う。これは仏教の華嚴思想と仏供の近現代的な概念に基づいていると言える。円仏教信仰は、真理における 仏供 として表現することができる。すなわち、仏供はこの世界には仏しかないので、これらの仏に仏供すると、世界を仏国土に作ろうとすることである。従来の等像仏—仏像を言う—に向かって罪を与え、福を与える対象と信じてきたが、認知が発達した現代社会では、一つの方便にすぎないことを把握できるので、その根本に戻ろうとするものである。これらの考えの異面には、近代的合理性と脱神話的な思考が介入されていると言える。「一円相」の真理は、すべての宗教が起源としている世界である。その根本は真理を悟った仏の心から出発する³²。したがって、近所の宗教あるいは東洋の思想までも包括する真理的世界を象徴化した。一つの形而上学的な世界とも言える。しかしながら、このような真理が修行上の指標として現れる時は、より現実的であることがわかる。少太山は、

工夫する人が玄妙な真理を悟ろうとすることは、その真理を実生活に活用しようとすることであり、もし活用せずにそのまま置けば、これ無駄なことであり、今、法身仏の「一円相」を実生活に符合させて言おう。最初は「一円相」に会うたびに見性成仏する話頭にすべきであり、第二は、日常生活に「一円相」と一緒に円満に修行して、進む標本とすべきであり、第三は、この宇宙万有の全体が罪福を直接下さる事実に権能があることを知り、真理的に信じて進む対象とするべきであり、これらの真理を知る人は、「一円相」に会うたびに、まるで親の写真のように崇拜されるものである。³³とする。象徴が生と直結されることは、このように悟りと悟りの実践である修行として現

れる。修行の帰結である取捨力は「正義であると悟ったならば、事の大小にかかわらず、命をかけて実行するべきであり、第二は、不義であると悟ったならば、事の大小を論ぜず、命をかけてなさない³⁴」と言うように「率性要論」のように正義の実践として現れる。第3代の指導者であった大山金大挙もまた、この三学修行を

修徳至善=戒=大小事間に、いつも正しい取捨をして大取捨力を得る。動=外に正義を行い、あらゆる徳を積む工夫（外行正義）、静=中では戒律を守り、あらゆる悪を断つ工夫（内修戒律）。(『大山宗法師法門集』第一集、正典大意九、三学)

として同じ意を言及している。このように、円仏教の正義論は、「一円相」の真理を信じて修行する最終的な結果を示す。因果的に言うなら、因としての真理が正義と言う果として現れるものである。代表的な解析では鼎山宋奎が語った次の法門によく現れている。「無時禪」の綱領のなか、一心と正義の関係に、弟子の質問に対して、「一心が同じく働けば正義になり、雑念が同じく働けば不義になる³⁵」としたものである。日常の生の全体は信仰と修行によって示される正義によって完成されるべきと見たのである。

それでは、円仏教の正義論の現代的な意味は何か。正義論を調べてみると、何よりも分配の正義について平等を主張した人は、カール・マルクス (Karl Marx) で、社会的平等を正義の前面に打ち出した。これとは別に、アメリカの社会哲学者であるロバート・ノジク (Robert Nozick) のように、自由における国家権力の制限を主張した個人の自由に比重を置く学者の系列がある。そして、これらの両者を折衷したジョン・ロールズ (John Rawls) の正義論がある。ロールズは彼の「正義論」で「思想体系の第一徳目を真理だとすると、正義は社会制度の第一徳性である」と言う正義を下して自由と平等を現実的中庸の立場から、この問題を掘り下げた。これらの思想家たちは、自由と平等を正義の核心の価値と見て、社会の歴史的立場から正義の問題を人類の最終的な価値としている。

また、一方では東洋の伝統にも正義の価値が内在されていることがわかる。修身・齐家・治国・平天下、または内聖外王を主張する儒教や道教の場合がそれである。特に儒教の場合には、仁義こそ正義のもとであることがわかる。『周易』、『論語』、『孟子』で強調される四徳である仁義礼智に根源した仁義は、愛を根本する正義と言う側面を強調している。特に義の場合は、公義を強調する東洋の伝統をよく示している。ここから見ると、東洋こそ古くから社会的正義を強調してきた伝統が現代にも続いていると言うことができる。

円仏教の正義論はまた、これらの東西洋の両者の正義にも一定の部分に疎通されると言える。少太山は、仏法を信じる理由として仏法を時代に適応させて、家庭、社会、国家の

仕事がよくなることを希望して、仏教の虚無寂滅は『周易』の無極と太極、孔子の仁、子思の未発之中、『大学』の明明徳とその根本から合うとみた。そして、このような仏教の虚無寂滅に「道の体として仁・義・礼・智で道の用とし、人間の万事に放って使うことがわかることで、円満な大道³⁶」と言う。ここで、虚無寂滅は仏教の涅槃（Nirvana）としての悟りの境地を意味する。仏教を基盤として儒教の教えを受け入れて体用の関係とし、仁義礼智の四端が生の基準になるべきと言うものである。

少太山の弟子である鼎山もまた、大人と凡夫の性格を猛者が主張するようにと言う義と利になぞらえて説明する。彼は「凡夫は小さな利益を救うが、罪を犯して、かえって害を得る。真の利益は、ひたすら正義に基づき大義に合うことで得られるのである³⁷」といい、成人の生の正義と大義にあることを説いている。そして、道家つまり、宗教の信者に対して「その行動が正義の道を踏んでいるかいないかで人格を判断する³⁸」と主張する。円仏教の宗教としての現実的な価値は、このように東洋的正義論に深く関係していることがわかる。これは円仏教の教義の形成背景が東アジアと言う歴史文化的伝統とも関係があり、何よりも円仏教教義の形成過程で、儒学者である鼎山の役割が至大であったことを示すものでもある。少太山の悟りを東アジアの歴史文化的土壌に根付く方式を導入したと言える。

また一方で、最近まで議論されている西洋の正義論との関係では、仏法研究会の活動そのものとも深く連動されていると言える。円仏教の教名は、貯蓄組合（1917）、仏法研究会期成組合（1919）、仏法研究会（1924）へと変遷する。円仏教の宗教的原型は、組合であった。そして、次第に宗教的な世界に拡張される。貧村僻地で干拓事業を通じて農民共同体運動を始め、宗教共同体を企画した。分配的な定義を自らの組合員と実践したと言える。

もちろん西洋の正義論者が主張するほどの精緻した内容を持っていたのかは議論の余地があるが、仏法研究会の開教の意味を集約した「物質が開闢されるので、精神を開闢しよう」と言う、スローガンは資本主義に対抗するヨーロッパスタイルの社会主義運動の一つと見ても遜色がない。ここには、センシモン、フーリエのような空想的社会主義あるいはクロフトキーンの相互扶助論的な世界がうかがえる。しかし、何よりも、仏式の社会主義が近代的な姿を見せたことでも理解できる。これは、植民地下で、制限された自由の状況下で抵抗的民族主義を志向しようとした仏教改革論者たちの場合にも相通じる部分でもある。

ここでは、あらゆる個人の社会的な背景と条件が共同体のなかでは除外されて平等な関係を目指す中で、仏法の正義に立脚した現代的な宗教を目指したと言う点も、今日の議論

されている正義論とも通じるとも言える。実際に悟りと慈悲を目指す大乘仏教の精神が基盤になっていることもあるが、社会的な弱者や周辺の疎外者たちが仏法研究会と言う共同体のなかで集まってきたと言う点は、現代正義論において示唆するところが多い。宗教的自由を土台に、まだ共同体を追求していると言う点で、円仏教の今後の宗教的な歩みが、最終的には社会的正義論のもう一つの代案になるかは、さらに注目して調べる必要がある。

V. 結語

最近、慶尚北道星州の THAAD 配置の問題は、社会的に多くの論難を呼びおこしている。単に一つの地域の問題を越えて、朝鮮半島、東アジア、そして世界中に広がり、賛否両論の議論が繰り広げられている。ヨーロッパやアメリカ、中東、アジア圏から多くのメディアが現地で取材をしており、朝鮮半島の安保や米国の対中国戦略の観点からこの問題を扱っている。

しかし、このような巨視的な観点に埋もれて、実際に THAAD が配置されている蘇城里をめぐる星州と金泉、円仏教の主張はますます薄れていることも事実である。現文在寅政府の高空支持率に THAAD 問題は、マスコミからだんだん報道回数が減っており、大衆もまた、この THAAD 配置を既成事実化する認識の一端を示している。しかし、いつでも、この問題の実状が現れるはずであって、環境影響評価を巡って再燃される可能性が大きい。

問題は、この本質である。国際的な力関係によって、これまでも韓国には多くの被害を受けた。米国からは、THAAD 費用を支払えと言う要求はもちろん、民主国家としての韓国の法律は、安保優先の論理に押されて、その機能が無力化される危機に瀕している。また、前の政府が推進した THAAD 配置は、現政府に外交的に多くの負担を与えている。国論の分裂は、再論の余地がないだろう。中国からの経済的制裁の措置、例えば THAAD 敷地を国防部に提供したロッテは、中国内の事業で不当な措置に遭い、中国人観光客の韓国流入は制限された。現時点では、いくつかの改善の措置が見えるが、中国の THAAD への視線は完全におさまったと言うよりは、いまだに中国内部的には監視の対象である。

複数の専門家は、THAAD 配置により、朝鮮半島は南北の問題だけではなく、米国と日本はもちろん、中国とロシアまで朝鮮半島を自国の安全保障状況と結びつけ、有事の際には、介入する態勢を整えている。これまでの戦略兵器の朝鮮半島配置により、これらの論難が起こったのは珍しいことであった。ところが、米国の防衛兵器の配置がこのように大

きな反応を呼んできたのは、この武器が内包する多様な意味が大きいからである。

一つの宗教である円仏教は、これらすべての点を堪忍するには力不足である。ただし、宗教と言う人間の心性に基づいて平和の世界を作っていくための一つの隊列に共に参加したと言うことに意味がある。そして宗教的連帯、このような心の連帯を形成しながら、国内はもちろん、国際的な混乱に宗教的な平和的解決方法の主張を繰り返すことである。そして、この THAAD 配置の不合理な点を宗教的不義と判断し、この問題の平和的解決策を主張する大衆たちの運動に参加して力を合わせることである。そのような努力と力は、やはり円仏教の歴史と教義のなかから見出すことができる。本論考もまた、この点に着目して記述したものである。消極的な平和ではなくて、積極的な平和を志向する円仏教の努力がさらに拡大することを願い、筆を置く。

注

- 1 まず、この研究のため多くの資料を整理し、支援していただいた星州聖地守護円仏教非常対策委員会シチュエーションルーム長のコン・ミョンウン氏に感謝する。本論文は、まだ草案の段階である。まず、THAAD 反対運動を通じて円仏教の平和思想と社会教化論、そして正義論を中心にみていくことにする。以後、これに関わる一般論との関係を補完させ完成させるつもりである。現在まで、これに関連する論文として、Cho Sung-Youn (조성운)、Kim Seon-Pil (김선필) の共同研究である「星州韶成里の THAAD 配置反対運動と円仏教の未来 (성주 소성리의 사드배치반대운동과 원불교의 미래)」(『宗教研究』第 77 輯 3 号、韓国宗教学会、2017) がある。本論文は、円仏教の THAAD 配置反対運動に対して社会学的な立場から緻密な研究を進めるものである。
- 2 環境部は、37 項目を再検討すると言う条件で、これを承認した。この条件を充足させていないにもかかわらず、現在は一般環境影響評価を準備している。駐韓米軍からも 4 項目を要請し、このうち環境汚染復旧計画書提出を要求したが、まだ回答が無い。
- 3 この分野の専門家である Chŏng Uk-sik (정옥식) の『THAAD のすべて (사드의 모든 것)』(유리창, 2017) と Ko Young-dae (고영대) の『THAAD 配置の偽りと真実 (사드배치 거짓과 진실)』(나무의 숲, 2017) が最も精通している。そしてこれらの著述からは、THAAD の問題点とその解決法案までも提示している。軍事専門家であり正義党国会議員である金鍾大 (キム・ジョンデ) の場合、様々な言論メディアを通じて THAAD 無用論を論じている。そして、大統領統一外交安保特別補佐官である文正仁 (ムン・ジョンイン) もまた、THAAD は撤廃するべきと主張し、その方法についても多様なメディアを通じて言及している。
- 4 鷄龍山の山の麓にある、いわゆる「新都案 (新たな首都として検討された所)」と言う地域には、円仏教の訓練センターがあったが、軍事施設設置に協調し国家に譲渡した。
- 5 THAAD 配置半径 3.6km 以内には、許可なく人が立ち入ることができないとされているが、既に THAAD 部隊の前方には金泉市農所面月谷里、立石里、延明里、老谷里な

- どの村に 2 千人ほどの人が暮らしている。
- 6 代表的に国家が行った江汀村（ガンジョンマウル、강정마을）の土地占有と関連、この地域を自然保護の対象と指定した法律が多数あったが、すべて国家の行為に軍配が上がったことにより、諸公的法律は無気力な状態に処されている。
- 7 後半部の参考資料に最近までの活動状況が整理されている。
- 8 『大宗経』第 2「教義品」31 章。
- 9 この部分は、拙稿「少太山の平和思想」（『統一と平和』8-2 号、ソウル大学平和統一研究院、2016.12）でまとめたものである。
- 10 『正典』第 3「修行編」13 章の最初法語。
- 11 分かりやすく説明すると、「一垣のなか、一理に、一家のなか、一眷屬が、一仕事場で、一仕事人として、一円世界を建てよう（한 울안 한 이치에 한 집안 한 권속이 한 일터 한 일꾼으로 일원세계 건설하자）」と言う偈頌である。
- 12 1980 年代には、ユネスコ哲学・倫理局において普遍倫理プロジェクトを推進していた。1997 年にパリで「普遍倫理のための概念的、哲学的基礎」、1999 年に韓国で「普遍倫理とアジア価値」と言うテーマでシンポジウムが行われた。このような動きは、世界が一つの文化圏へと進む時点において、地球的問題解決のための早急の課題として浮上したものである。つまり、地球全体の憲法を制定するための土台を構築しているのである。
- 13 論語では、孔子が「私が何を知っていようか、何も知らないのである。しかし、もし卑賤な者が私にもものを尋ねたなら、全く空の如くして、その問いの両端（本末）を完全に把握したのち、できる限りを尽くして答えよう」（子曰吾有知乎哉 無知也。有鄙夫問於我 空空如也。我叩其兩端而竭焉）と言うように、両端を思慮する心構えにも現れている。仏教もまた苦と樂の修行と生の両端を排除する中道の行為として中道を重視している。また、縁起の理法に基づき生と滅、断と常、一と異、去と来の中道を強調している龍樹の「八不中道」が有名である。中国においては空の真諦、仮の俗諦、中の非有非空が円融すると言う三諦円融觀を明らかにした天台智顛大師の教えがある。
- 14 この章では、拙稿「円仏教の平和運動と転換期教団の変革」（『円仏教星州聖地守護非常対策委員会円仏教平和大討論－聖地の守護を超え、平和運動に－』、2017 年 7 月 13 日、円仏教中央本総部）を部分抜粋したものである。
- 15 金善弼、前掲論文、p.42。金善弼が引用した部分は、ブルデュー、ピエール（Bourdieu, Pierre）、李忠漢、金善美訳「第 2 章 資本の形態（The Forms of Capital）」、社会資本－理論と争点、グリーン、2007 年、pp. 63-65。
- 16 金善弼、同上。
- 17 金泰昌が主導した日本の公共哲学の議論は、公共哲学シリーズ（東京大学出版会、2001～006）全 20 巻で、様々な領域の公共哲学の問題を扱っていることが詳細にわかる。韓国で出版された本では、公共哲学物語（金泰昌口述、柳生誠記録、趙晟桓訳、鄭址郁移り、祀る人々、2012）、公共哲学会話（金泰昌口述、池本恵子記録、趙晟桓移り、祀る人々、2017）などがある。
- 18 金泰昌、「公共哲学とは何か？」、哲学と現実、哲学文化研究所、2007 年、pp.82-83。
- 19 同上、p.83。活私開公は埋没された私を生かして公を開き、調和を図るものであり、公私共媒もまたいろいろな文脈で公と私が媒介される公共性を志向するものである。
- 20 拙稿、「円仏教の宗教性と公共性」、『仏教学報』79 輯、東国大仏教文化研究院、2017 年を参照。
- 21 趙晟桓、開關 54 号、2015 年 5 月。
- 22 金並総評訳『史記』1-10 卷（Jipmoondang）、1994 年参考。
- 23 趙晟桓、前掲文。
- 24 元永常、前掲論文（2017）参考。

- 2⁵ ここで正義の概念を説明するのは、論外である。もちろん正義は法的正義、宗教的正義、政治的正義、企業正義など、様々に説明することができる。しかし、その正義が宗教的に絶対的な真理の前に善悪を判断することであれば、すべての分野の正義にも、基本的に服従される。
- 2⁶ 封建社会の秩序を構築しようとしていた孟子であるが、彼は当時の君主に断固として言う。「王はなぜ利益を申すのか。ただ仁義があるのみ」、「受がないのに与えることは富に歓心を買おうとするものである。どうして君子でありながら歓心を買おうとする財物に買収されることができだろうか。」、「私はかつて孔子が大勇をいったことを聞いたことがある。」、「自ら反省し、義でなければ取るに足りない下品な人でも、私は恐ろしく思わないことができないが、もし、自分で反省して義であれば、千万人であっても私は行って敵対する」と。義は観念ではなく、歴史的な信念であることがわかる。
- 2⁷ 円仏教教史第3編盛業の結実。ここでは、多少簡略されている。①一体宗教と世界人類を一つに見て、世界の平和の先頭に立つ主人になること。②貧富の格差、種族の差別のない平等で世界の秩序を確立すること。③悠久な民族の伝統的知恵をもとにして世界的な精神運動をこの地で達成すること。④国際的宗教連合機構を通じてすべての宗教の融通を討議し、真理的宗教の信仰、事実道徳の訓練に宗教を生活化すること
- 2⁸ ①正しい道理、公明正大なもの、昔から思想家によって立法者や為政者がその社会の中で、究極的に実践しなければなら規範または価値にしてきた概念。②知恵・勇気・節制が完全に調和を成したもの。③複数の徳の中正した状態。④共同体の秩序を守護すること。⑤不正・不義・権謀術数を退けること。
- 2⁹ ①法律：法律と言うのは、人道の正義の公正な法則。②作業取捨：作業とは、何でも眼・耳・鼻・舌・身・意の六根の作用の名前であり、取捨とは、正義を取り、不義を捨てる名前。③無時禅方：六根が無事と雑念を除去し、一心を養成し、六根が類似すると不義を除去して、正義を養成する。④率性与論：13、正しいことであれば、嫌でも死ぬ気でやるべきであり、14、正しくないことであれば、死んでもするべきではないであろう。⑤最初法語：精神を修養して分を守ることによって安定を得るものであり、喜・怒・哀・楽の場合になっても正義を失わないこと。
- 3⁰ 僧侶ティック・ナット・ハン (Thich Nhat Hanh) が主張した。筆者は、円仏教は仏法僧の三宝を現代的に改革した宗教と見做す。つまり、大乘仏教の般若思想に基づいて仏宝は「一円相」を信仰の対象と修行の標本で、法宝は独自の経典の編纂に、僧宝はサンガ (samgha、衆) の社会化と規定している。円仏教は仏法の時代化、生活化、大衆化をかけただけに、社会的正義に徹底的に対応するしかないのだ。
- 3¹ 『大宗経』第2「教義品」4章
- 3² 「一円相」は仏の心体を表現したものであり、形体は単なる人の形に過ぎないものであるが、心は廣大無量で、よく、有無を総じて摂し、三世を貫いている。これは天地万有の本源であり、言葉では言い表せない入定の境地である。儒家ではこれを太極、あるいは無極といい、禅家はこれを自然、あるいは道といい、仏家ではこれを清浄法身仏と言うのだが、その原理においては、いずれも同じなのである。たとえ、どの方面、どの道を通るといっても、窮極においてはみな、一円相の真理に帰一するはずで、もし宗教と名づけながら、この真理に根源していないとすれば、これは邪道たるを免れえないであろう。(『大宗経』第2「教義品」3章)
- 3³ 『大宗経』第2「教義品」8章
- 3⁴ 『大宗経』第3「修行品」2章
- 3⁵ 『鼎山宗師法語』第6「経義編」30章
- 3⁶ 『大宗経』第6「弁疑品」20章
- 3⁷ 『鼎山宗師法語』第9「務本編」39章
- 3⁸ 『鼎山宗師法語』第10「勤実編」12章